

機関番号：22701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20530575

研究課題名(和文) 他者の多様性への寛容：幼児、児童、青年における集団への受け入れに関する判断

研究課題名(英文) Tolerance to Diversity: The Judgment of Children and Adolescents When Accepting Others to Their In-Groups.

研究代表者

長谷川 真里 (HASEGAWA MARI)

横浜市立大学・国際総合科学部・准教授

研究者番号：10376973

研究成果の概要(和文)：

他者の集団への受け入れについての判断から「寛容 (tolerance)」の発達を検討した。道徳的原理をあてはめ、他者の変容を求める小学生、徐々に他者の特徴を考慮して判断するようになる中学生、集団の種類も人物の特徴も明確に区別して判断し、他者をありのままに受け入れるようになる大学生、という変化が見られた。これらの寛容性判断は、集団や友人に対する志向性と関連した。また、異質な他者との日常的な交流が、寛容な態度を育成することが示唆された。

研究成果の概要(英文)：

This article examined the development of tolerance in children and adolescents. The elementary school children, who typically demand others to conform to their in-groups, used moral principles when judge and accept others to their in-groups. The junior high school students are in the process of learning to judge others as they consider differences among others' characteristics. The university students are able to clearly distinguish and judge types of groups as well as characteristics of others. The tolerance to diversity among children and adolescents was associated with their interpersonal orientation towards groups and friends. The results of the study implied that an interaction with heterogeneous groups of people was likely to foster tolerance to diversity.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：3901

キーワード：寛容、排除、仲間関係、道徳性

## 1. 研究開始当初の背景

他者の多様性に対する「寛容(tolerance)」は、政治的な寛容性と個人的な寛容性の2つの側面から検討されてきた。例えば、自分と異なる意見を持つ他者を「認めること」、自分たちの集団に「受け入れること」などは、個人的な寛容性の問題であり、外国人子女教育における異文化接触場面やいじめ場面において現在大きな問題となっている。本研究は、他者の集団への受け入れについての判断の発達を探り、いじめなどの現実的な集団排除の問題に基礎資料を提供することを試みる。集団への受け入れや排除についての判断について、長らく子どもが非寛容から寛容へと一元的に変容する発達段階が想定されていた。しかし、実際には、人は文脈に応じて寛容であったりなかったりする。最も難しい問題は道徳的問題に抵触するときであるといわれる。多元的な発達を前提に研究する必要があると考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、他者の多様性を受容する態度、つまり「寛容 (tolerance)」の発達について、他者を集団に「受け入れる」ことに関する判断から検討するものである。その際、第1に、文脈要因を考慮した多元的な発達過程の実態を検討し(寛容の実態)、第2に、発達過程を支える側面との関連性を含めた発達過程のモデルを提示する(支える要因)。さらには、第3に、異質性を受容するという過程が人間の成長においてどのような意味を持つものであるのかを探る(成長との関連)。

## 3. 研究の方法

次の5つの研究を行った。すべて質問紙調査である。大学生を対象とした研究1、研究

2では、寛容性判断に関係する文脈要因の整理を行った。続く、小学生と中学生を対象とした研究3では、文脈要因を考慮した多元的な発達過程の実態を検討した。研究4では、小学生と中学生を対象に、寛容性判断と関係が予想される要因を調べた。研究5は、大学生を対象に、寛容な態度が心理的、社会的にどのような意味を持つものであるのかを検討した。最後に、以上の知見をもとに、発達過程のモデルを提出した。

## 4. 研究成果

### (1) 研究1

#### 目的

大学生を対象に、どのようなときに集団への受け入れを認めるのか、あるいは排除するのかについての判断基準を抽出する。

#### 方法

調査対象者 首都圏の大学生 75名(男子20名、女子55名)、質問項目 ①集団への新規参入を嫌だと感じた体験(時期、グループ、新規参入者、嫌だと感じた理由それぞれについて詳細を記述) ②集団への新規参入の拒否が正当化される場合(正当化されると考えられるグループ、参入者、参入拒否の理由を記述)。それぞれ最大3つまでの記述を求めた。手続き 大学の講義中に実施した。所要時間は15分程度であった。

#### 結果と考察

質問項目①では118件の回答を得た。中学での体験が最も多く、自分たちの属する集団の斉一性を求める時期と一致していた。グループは、遊び仲間グループのような私的な集団、班、部活動、委員会のような公的な集団に分類可能であった。新規参入を嫌だと感じた理由はTable1のとおりであった。

Table 1 集団への新規参入を嫌だと思った理由(時期と集団のタイプごとの回答数)

	小学校		中学校		高校		大学	
	私的集団	公的集団	私的集団	公的集団	私的集団	公的集団	私的集団	公的集団
性格の不一致	4	3	12	6	5	1	2	1
集団斉一性	3	3	9	5	5	5	2	2
集団内の関係	9	0	4	2	2	0	1	1
性格の悪さ	7	1	11	3	1	1	1	3
集団の損失	1	0	3	2	1	1	0	1
その他	1	2	0	0	0	0	0	0

質問項目②については、90件の回答を得た。集団の特質によって参入拒否の正当化理由が異なっていた。

## (2) 研究2

### 目的

文脈要因を考慮して作成された場面に対する判断を求め、文脈要因が実際に判断においてどのように利用されるのかを探る。具体的には、「私的集団への参入」「私的集団からの排除」「公的集団からの排除」という3つの「状況」と5種類の「他者」を組み合わせた場面を設定する。

### 方法

調査対象者 首都圏の大学生 38名。質問項目 場面3(私的参入・私的排除・公的排除)×他者5(道徳的逸脱・慣習的逸脱・個人的趣味・相性・奇抜な容姿)の要因計画である(「場面」は被験者間要因、「他者」は被験者内要因)。「私的参入」は大学生の遊び仲間グループ(私的なグループ)が商店街に遊びに行く計画をしているとき、グループ外の他者が新規参入しようとする場面、「私的排除」は同様の私的グループが商店街に遊びに行く計画でグループ内の一人を誘わない場面、「公的排除」は授業で指定された商店街の調査活動班(公的なグループ)で、商店街に調査に行くときに班の一人を誘わない場面である。提示される他者は、暴力的な人(「道徳的逸脱」)、手づかみで食事をするマナー違反の人(「慣習的逸脱」)、黄色い服を着る人(「個人的趣味」)、メンバーと気が合わない人(「相性」)、髪を緑色に染めるなど

奇抜な容姿をしている人(「奇抜な容姿」)である。提示された5人に対し「受け入れ判断:遊ばなくてよい(1)~遊ばないのはよくない(4)」、「受け入れ判断の理由づけ(自由記述)」、「変容強要判断:変わるべきではない(1)~変わるべきである(4)」を質問した。手続き 大学の講義中に実施した。所要時間は10分程度であった。

### 結果と考察

受け入れ判断 場面(3)×他者(5)の分散分析を実施したところ、場面と他者の主効果が有意であった( $F(2,34)=7.27, p<.01$ ;  $F(4,136)=23.01, p<.001$ )。多重比較の結果、「私的参入」は「公的排除」よりも排除を認める判断がされた。他者においては、「個人的趣味」・「奇抜な容姿」・「慣習的逸脱」>「相性」>「道徳的逸脱」であった( $p<.05$ )。

受け入れ判断の理由づけ 「集団の調和」は、「私的参入」と「私的排除」においてみられたが、「公的排除」ではほとんど見られなかった。一方、「集団の目的」は、「公的排除」においてみられ、私的な集団を対象とした判断ではみられなかった。私的か公的かという集団の特徴により判断の根拠が異なることが示唆された。

変容強要判断 場面(3)×他者(5)の分散分析を実施したところ、他者の主効果が有意であった( $F(4,136)=36.07, p<.001$ )。奇抜な容姿や色の趣味を変える必要はないと判断され、一方、道徳的逸脱や慣習的逸脱にあたる行為は改めるべきであると判断された。

## (3) 研究3

### 目的

排斥の対象となる人物と集団の特徴による判断の発達差を検討するために、5種類の人物と2種類の集団(私的集団と公的集団)において、「排除判断(集団からの排斥)の是

非)」と「変容判断（その人物は変わるべきか）」を求めた。

仮説 ①中学生の寛容性が最も低い（U字型の変化）。②大学生と同様，小学生も排除判断において集団と人物の特徴を考慮する。③小学生は他者に対し変容を求める。

#### 方法

対象者 小学4年生57名，小学6年生68名，中学2年生69名，大学生65名。質問項目 集団2（私的・公的）×他者5（道徳的逸脱・慣習的逸脱・個人的趣味・相性・奇抜な容姿）の要因計画（「集団」は被験者間要因，「他者」は被験者内要因）。「私的」集団は，グループが商店街に遊びに行く計画でグループ内の一人を誘わない場面，「公的」集団は，授業で指定された商店街の調査活動班で，商店街に調査に行くときに班の一人を誘わない場面である。提示される他者は研究2と同じである（すべて回答者と同年齢として提示）。提示された5人に対し「排除判断：誘わなくてよい（1）～誘わないのはよくない（4）」，「排除判断の理由づけ（自由記述）」，「変容判断：変わるべきではない（1）～変わるべきである（4）」を質問した。手続き授業中に質問紙を配布、回収した。

#### 結果

排除判断 学年（4）×集団（2）×他者（5）の分散分析の結果，人物と集団の主効果（ $F(4,1004)=66.49, p<.001$ ;  $F(1,251)=34.10, p<.001$ ），人物×学年，人物×集団，学年×集団の交互作用が有意であった（ $F(12,1004)=3.66, p<.01$ ;  $F(4,1004)=10.47, p<.001$ ;  $F(3,251)=4.60, p<.01$ ）。単純主効果の検定の結果，「道徳的逸脱」「個人的趣味」において小4>中2，「奇抜な容姿」において大>小6，「道徳的逸脱」「慣習的逸脱」「個人的趣味」「相性」において「私的集団（仲良しグループ）」<「公的集団（班）」，小4・

小6・大において「私的集団（仲良しグループ）」<「公的集団（班）」であった（ $p<.05$ ）。なお，得点が高いほど「誘わないのはよくない」という判断，つまり寛容性が高いことを意味する。変容判断 学年（4）×集団（2）×他者（5）の分散分析の結果，人物，学年，集団の主効果（ $F(4,992)=208.51, p<.001$ ;  $F(3,248)=4.10, p<.01$ ;  $F(1,248)=4.36, p<.05$ ），人物×学年，人物×集団の交互作用（ $F(12,992)=6.17, p<.001$ ;  $F(4,992)=5.07, p<.001$ ）が有意であった。単純主効果の検定の結果，「慣習的逸脱」において小4>小6>中2，「奇抜な容姿」において小6>中2>大，小4>大，「相性」「奇抜な容姿」において「私的集団（仲良しグループ）」<「公的集団（班）」であった（ $p<.05$ ）。なお，得点が高いほど変容を求める判断であることを意味する。

#### 考察

仮説①は支持されず，仮説②，仮説③はおおむね支持された。小学生でも集団や人物の特徴を考慮して判断を行った。中学生を除き，おおむね仲間集団よりも班に対して排除を認めない判断がされた。小学生は異質な他者への変容を求める傾向が高かった。

#### （4）研究4

##### 目的

多くの時間を共有する仲間集団は子どもたちにとって重要な意味をもつ。集団からの排除に関する判断もまた，児童期から青年期にかけての友人関係への意識や志向性と関連することが予想される。友人および集団関係の意識の点から，排除判断にかかわる要因を探る。

仮説 固定的集団志向性，閉鎖的集団志向性，友人との同調欲求が高いと寛容性が低く，友人との親和欲求，相互尊重欲求が高いと寛容

性が高い。

#### 方法

対象者 小学4年生 65名, 小学6年生 62名, 中学2年生 54名。研究3と同様に, 2種類の集団(私的・公的)に対し, 5種類の他者(道徳的逸脱・慣習的逸脱・個人的趣味・相性・奇抜な容姿)についての排除判断を求めた。また, グループ志向性尺度(佐藤,1995)と友人への欲求尺度(榎本,2003)を実施した。得点化 排除判断は研究3と同じ。「固定的集団志向」(“グループに入れるかどうかは自分にはとても重要なことだ”など), 「閉鎖的集団志向」(“自分の仲間には他の人につきあってほしくない”など), 「友人欲求尺度」(下位尺度「相互尊重欲求」「親和欲求」「同調欲求」)それぞれに対し5件法で回答を求めた。

#### 結果と考察

排除判断得点を従属変数, 学年, 集団タイプ, 性別, 集団志向性尺度, 友人欲求尺度を独立変数とした重回帰分析を人物の種類ごとに行った。正の関係があった項目は「慣習的逸脱」では「相互尊重欲求」, 「個人的趣味」では「相互尊重欲求」「親和欲求」, 「相性」では「相互尊重欲求」, 「奇抜な容姿」では「相互尊重欲求」であった。負の関係があった項目は「慣習的逸脱」では「同調欲求」, 「相性」では「閉鎖的集団志向」, 「奇抜な容姿」では「固定的集団志向」であった。このように, 有意な結果が出たものに関しては, 固定的集団志向性・閉鎖的集団志向性・友人との同調欲求が高いと排除を認め, 友人との親和欲求・相互尊重欲求が高いと排除を認めないことが示唆され, おおむね仮説は支持された。

#### (5) 研究5

##### 目的

寛容性の主要な規定要因は, 異質な他者

との接触である。また, 寛容な態度を持つことで, 社会的ネットワークが広がり, さらに心理的な充足感が得られると予想される。そこで, 寛容な態度の育成に係る体験として, 異質な他者との接触経験(外国人や年の離れた人との交流)を取り上げる。そして, 寛容な態度のもたらすメリットとして, 互恵的なネットワークの構築(社会的な側面)と生活充実度(心理的な側面)の2つを取り上げる。

#### 方法

調査対象者 首都圏の大学生 101名(男性45名, 女性56名)。手続き 質問紙調査。2つの講義で質問紙を配布, 回収した。所要時間は約10分であった。質問項目 ①年齢 ②性別 ③寛容性(「意見の異なる他者に対する寛容性(3項目, 3点~12点)」, 「迷惑行為をする他者に対する寛容性(2項目, 2点~8点)」, いずれも小船・辻(2007)を使用、④一般的信頼感(3項目, 3点~12点)、小船・辻(2007)の質問項目を使用、⑤PCメールおよび携帯メールの使用数(それぞれ「行わない」~「51通以上」の7件法)、⑥外国人または年齢の離れた他者との交流の経験(「i 外国人の友人がいる」, 「ii 年の離れた友人がいる」, 「iii 半年以上の海外留学や海外生活の経験がある」, 「iv アルバイト先で, 外国人と一緒に働いている」, 「v アルバイト先で, 年の離れた人と一緒に働いている」, 「vi 授業以外で, 外国人と接触する機会がしばしばある」, 「vii 授業以外で, 年の離れた人と接触する機会がしばしばある」, 「viii ネット上で, 外国の人と交流している」, 「ix ネット上で, 年の離れた人と交流している」の9項目に対して「はい」または「いいえ」で回答)、⑦生活充実度(大野(1984)の20項目, 5点~100点)、⑧知人, 友人, 近所の人, それぞれの人数、⑨知人, 友人,

近所の人の中で手助けや手伝いをしてくれ  
そうな人のそれぞれの人数。

#### 結果と考察

寛容性を規定する要因を探るために、質問  
項目③を従属変数、①、②、④、⑤、⑥、⑧  
を独立変数とした重回帰分析を行った。その  
結果、意見の異なる他者に対する寛容性につ  
いては、信頼性、ネットで年の離れた人との  
交流が有意であった( $\beta = .28, .26$ )。迷惑行為  
をする他者に対する寛容性については、ネッ  
トで外国人との交流が有意であった( $\beta = .26$ )。  
寛容な態度のもたらすメリットを探るため  
に、質問項目⑦と⑨を従属変数、①、②、③、  
⑧を独立変数とした重回帰分析を行った。な  
お、独立変数の⑧は、従属変数の友人、知人、  
近所の人それぞれに対応する変数を投入し  
た。その結果、年齢、性別などの要因を統制  
しても、ネットでの年の離れた人との交流が  
意見の異なる他者に対する寛容性、ネットで  
の外国人との交流が迷惑行為をする他者に  
対する寛容性に関係があった。また、意見の  
異なる他者に対する寛容性の高さは、生活充  
実度と知人の中での手助けをしてくれそう  
な人数、迷惑行為をする他者に対する寛容性  
は友人の中での手助けをしてくれそうな人  
数と近所の人の中での手助けをしてくれそ  
うな人数に関係があった。このように、異質  
な他者との日常的な交流が、寛容な態度を育  
成し、またこのような態度が社会的・心理的  
な益をもたらすことが示唆された。なお、本  
研究は相関研究であり、因果関係は不明であ  
る。

#### まとめ

「集団排除を認めるか否か」の側面に絞り、  
子どもの寛容性に関する判断の発達過程を  
探った。その結果、図1に示すような発達の  
様相が示唆された。道徳的原理をあてはめ、

他者の変容を求める小学生、徐々に他者の特  
徴を考慮して判断するようになる中学生、集  
団の種類も人物の特徴も明確に区別して判  
断し、他者をありのままに受け入れるよう  
になる大学生、というような変化が見られた。  
さらにこれらの寛容性判断は、集団や友人に  
対する志向性と関連が見られた。また、大  
学生を対象とした調査から、寛容な態度は、心  
理的、社会的な利益につながることを示唆さ  
れた。

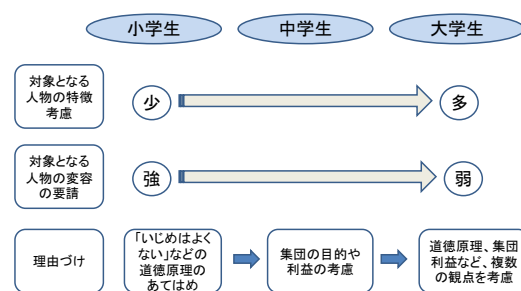


図1 寛容性判断の発達の变化

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)  
長谷川真里 印刷中 仲間外れが正当化されるとき 「発達」 ミネルヴァ書房  
長谷川真里 2011 他者の多様性への寛容：大学生における集団からの排除についての判断 横浜市立大学論叢 62, 85-96.

〔学会発表〕(計4件)  
長谷川真里 2009 他者の多様性への寛容 (1) 日本心理学会第73回大会  
長谷川真里 2009 他者の多様性への寛容 (2) 日本教育心理学会 第51回総会  
長谷川真里 2010 他者の多様性への寛容 (3) 日本教育心理学会 第52回総会  
長谷川真里 印刷中 他者の多様性への寛容 (4) 日本心理学会第74回大会

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者  
長谷川 真里 (HASEGAWA MARI)  
横浜市立大学 国際総合科学部・准教授  
研究者番号：10376973